

人生を変えてくれた酪農 ～私らしく生きる～

帯広畜産大学 畜産学部 3年 鈴木 なごみ

「誰とも関わりたくない。人のいないところへ行きたい」これが、私が酪農の道に進むことを決めた一番の理由でした。

私は小学生のときに中学受験をして、中学から高校までの6年間を茨城県にある私立の中高一貫校で過ごしました。進学校だったので、中学生のころから周りの子たちと比較され、その中でも自分は1番でなくてはならないというプレッシャーに耐えながら必死に努力をしていました。周りから認めてもらうことだけでしか幸せを感じる事ができない。そんな自分がとにかく嫌いでした。

高校3年生になると、周りの友達は自分の行きたい大学に進学するために勉強を始めていました。ですが、テストで良い点を取るだけのために努力してきた私は、自分が何をやりたいたいのかが分からず、周りが目標に向かって精一杯努力している中、一人だけ取り残された気持ちになりました。「やりたいことが見つからないのに、こんなに努力したって意味が無い」「比べられるのはもういやだ」「私は私らしくいたい」そして、「もう人と関わりたくない」次第にこんなことを思うようになりました。これからどうしたらいいのか、悩んだ私は酪農なら誰とも関わらずに牛だけに囲まれて過ごすことができるのではないかと思い、酪農に興味を持ち始めました。しかし、両親からは「せっかく私立に行かせたんだから、良い大学に行って、良い企業に就職してね」と言われました。私も初めはそうすべきだと思っていました。ですが、大学受験が近づくにつれ、このまま周りに流されていたのでは自分は一生変わらないのではないかという不安に駆られました。そして私は自分の周りの環境を変えたいという一心で両親の反対を押し切り、北海道の帯広畜産大学に進学することに決めました。

大学に入学後、1年生の夏休みに大学の先輩の紹介で北海道の牧場で2週間の酪農実習をしました。その牧場は北海道の北の端、猿払村にある、搾乳牛40頭ほどの家族経営の牧場でした。それまで酪農というものを全く知らなかった私にとって、その牧場で過ごす日々は毎日が楽しくて新鮮でした。牧草地を覆う早朝の朝焼け、風で光りながら揺れる牧草、牛舎からみえる夕日、目に入る風景すべてが輝いて見えました。また、牛追いや搾乳、機械作業、牛舎の掃除など、地味な作業であればあるほど没頭し、周りの目を気にせず自分らしくいることができました。ありのままの自分でいられる、そんな酪農の安心感に包まれた私は、いつか酪農家になって自分の牧場を持ちたいと思うようになりました。

牧場での実習が1週間を過ぎた頃、その牧場の親方から「どうして酪農がしたいんだ？」と聞かれました。私は「酪農なら、人と関わらずに過ごせると思ったからです」と答えました。すると、「酪農は人との関わりの中で成り立つんだぞ」と言われました。そのときの私は

酪農と出会ったことで、ようやく自分を飾らずに居られる場所を見つけたと思っていたので、その言葉を素直に受け入れることができませんでした。

親方から言われたその一言に不安は残しつつも、すでに酪農の虜になっていた私は、実習から帰ってきた後すぐに搾乳のアルバイトを始め、大学の長期休みには北海道内の色々な牧場で実習をするようになりました。そうして大学の2年間があっという間に過ぎ、気がつけば私の周りの環境は大きく変化していました。北海道に来る前に私が思い描いていた酪農像は、広い放牧地の中心に私一人が立ち、その周りを牛だけが囲んでいるというイメージでした。ですが、酪農と深く関わっていくうちに私は牛だけではなく、大勢の人に囲まれていました。

その環境の変化は、私が一番望んでいたことであつたにも関わらず、次第に負担に思うようになりました。酪農の世界は想像以上にせまく、一人とつながればそこから放射状に何十人、何百人へと人間関係の輪が広がります。私を応援してくれているすべての人の期待に応えなくてはいけない。周りが思っている自分のイメージに近づかなくてはいけない。そうして私はだんだんと自分の立っている位置が怖くなっていきました。

理想の自分と現実の自分とのギャップに疲れ始めた頃、もう一度、初めての実習でお世話になった酪農家さんに会いに行きました。搾乳中、その親方は何の前触れもなく私に、「分からないことは、分からない。できないなら、できないって言っていいんだぞ」と言いました。その一言でそれまで張り詰めていた心が一気に解放され、思わず涙がこぼれました。そのときに初めて、私は周りからの評価ばかりを気にして、良いように見せようとして、自分で自分を苦しめていたのだと気がつきました。

その日から私は周りの目を気にして背伸びをしたりせず、ありのままの自分でいようと努力をしました。私は、自分をさらけ出せば自分の周りから人が居なくなってしまうのではないかと思っていたのですが、自分が心を開けば開いた分だけ、色々な人が自分を認めてくれるようになりました。特に嬉しかったのは、両親が牛と一緒に写っている私の写真を見て「あなたらしいね」と言ってくれたことです。親の期待に応えられず、勝手に北海道に来てしまったことがずっと心残りだったのですが、両親からのその一言で「これでよかったんだ」と思うことができました。そしてそれは自信にもつながり、もっと多くの人と関わりたいと思うようになりました。

今、私の周りにはたくさんの酪農家さんや友達、応援してくださる方々があります。少し前の私であれば、その環境を重苦しく感じ避けていたと思います。しかし今は、人とのつながりの中に居られることがとても心地良いと感じ、このつながりをこれからさらに広げていきたいと思っています。そう思えたのは、酪農という個人の価値観が尊重される環境の中で、自分のペースでしっかりと自分自信と向き合うことができたからだと思います。

私の夢は新規就農をして酪農家になることですが、そこがゴールではありません。自分の牧場を持ち、まずは自分が自分らしく生きること。そして昔の私のように自分の殻に閉じこもり一人で苦しんでいる人に、一歩外に出て自分を変えるきっかけを与えられるような酪農家になりたいと思っています。そのために子どもから大人、海外からもファームステイの受け入れをして、色々な人に酪農の魅力を伝えたいと思っています。

私の人生のスタートはまだ始まったばかりです。これから先、いままで経験してこなかったような場面にたくさん直面すると思います。それでも自分らしさを見失わず、私の人生を大きく変えてくれた酪農への感謝を忘れず、できるだけ多くの人と関わり、その関わりの中で自分自身と向き合っていきたいと思っています。

そしていつか、牧草地の中心で自分の子どもに「あなたはあなたのままでいいよ」と言ってあげたいです。